

## 研究ノート

# 日本軍が中国に建設した忠霊塔

横山 篤夫

- 1 はじめに
- 2 北京の忠霊塔
- 3 上海の忠霊塔
- 4 おわりに

キーワード：大日本忠霊顕彰会・忠霊塔・  
八宝山・大場鎮・戦没者追悼

### 1 はじめに

日中戦争が長期化して以後、アジア太平洋戦争の終結に至る間に戦没者は増加の一途を辿った。その遺骨を収納して顕彰する施設として、日本陸軍のイニシアチブのもとで建設されたのが忠霊塔である。

戦没者の霊魂を祀殿に神として祀って慰霊顕彰する靖国神社・護国神社とは、納骨施設を伴う点で異なる追悼施設であった。また戦没者への弔意や慰霊顕彰の思いや、勝利の記憶を後世に伝えるために各地に建設された忠魂碑などと

も機能を異にした。しかしこれらは相互に関連し合いながら、日本国内で戦没者の慰霊顕彰施設としてその役割を果たしてきた。

そのため近代日本の戦没者追悼問題を論じるにあたっては、靖国神社だけを取り上げるのでは不十分である。<sup>(1)</sup> この認識のもとに近年戦争記念碑や忠霊塔の調査、研究が進み、筆者も忠霊塔に関するいくつかの論考を発表してきた。<sup>(2)</sup>

忠霊塔建設を推進したのは財団法人忠霊顕彰会（以下「顕彰会」と略記）であった。日中戦争開戦2周年にあたる1937年7月7日、東京の九段会館で盛大に発会した。会長には前関東軍司令官、後備役陸軍大将の菱荊隆が就任し、名誉会長の平沼騏一郎首相以下政官軍民の有力者が役職に並び、まるで準政府機関のような組織であった。<sup>(3)</sup>

日中戦争の激化にともない日本軍将兵の戦没者が増加し、身近な市町村単位の慰霊顕彰施設の要望が強まった。当時の交通事情では、靖国

(1) 1975年に大阪府箕面市の戦没者遺族や市民が、忠魂碑建設のために市有地を無償で貸し補助金を支出し市長が慰霊祭に出席するのは、政教分離を定めた憲法に違反するとして提訴した。この箕面忠魂碑訴訟が戦没者追悼の在り方を問うたことがこの分野の研究を促した一つの契機となった。

(2) 忠霊塔をテーマに発表した拙稿を発表順に掲げ、この引用は①、②、・・・で表記する。

①「真田山陸軍墓地納骨堂建設をめぐる」『ヒストリア』第186号、2003年9月

②『『満州』の忠霊塔と大阪の忠霊塔建設』『大阪民衆史研究』第60号、2007年2月

③『『満州』に建てられた忠霊塔』『東アジア研究』第48号、2007年3月

④「大阪の忠霊塔建設」『戦争と平和』第16号、2007年3月

(3)『大阪朝日新聞』1939年7月8日。なおこの顕彰会成立の前提となる「満州」の忠霊塔建設の経緯については拙稿③に詳しく記述した。

神社や府県一社を原則とした護国神社は特別の日以外に参拝するのは困難であった。陸軍の連隊衛戍地や海軍の鎮守府などに陸海軍が設置した陸海軍墓地は、戦没者の増加により合葬墓が原則となり、従来の個人墓を中心とした追悼施設から変質しはじめていた。<sup>(4)</sup>

そうしたなかで、戦没各将兵の個人の分骨を納める忠霊塔を建設しようという顕彰会の呼びかけは、陸軍の後援を受けるとともに遺族や仏教界の参加を得て広がった。しかし戦没者追悼施設の中核に靖国神社・護国神社を置こうとする内務省、神社界との対立が生じた。

そのため陸軍省、海軍省、軍事保護院、内務省神社局、同警保局が協議し、1939年11月11日に内務省から地方長官宛に顕彰会の事業を定義し規制する次の通牒が発せられた。<sup>(5)</sup>

今次事変戦没者ノ忠霊顕彰ヲ目的トシテ過般関係官民ノ発企ニ依リ財団法人大本忠霊顕彰会成立サレ候処、右ハ皇軍主要会戦地ニ於ケル忠霊塔ノ建設ニ対スル助成並ニ之カ維持及祭祀ヲ主タル事業トシ、若シ財政上余裕ヲ生シタルトキハ併セテ内外地ニ於ケル忠霊塔建設ニ対スル助成指導其ノ他ノ忠霊顕彰事業ヲ行ハントスルモノニ有之候

この結果顕彰会の主な事業は、海外の主要戦場跡への忠霊塔建設であり、国内の忠霊塔建設は財政上余裕のある場合には担当してもよいと

制限された。また陸軍基地の所在地で忠霊塔を作る場合は、軍当局と連絡して陸軍基地に忠霊塔を建てることなどが通牒された。

顕彰会は新聞社の協力を得て精力的に忠霊塔建設のための募金運動を始めた。その結果海外の主要戦場跡に忠霊塔建設の目処がついたとして、国内の忠霊塔建設を推進した。こうして建設された国内での忠霊塔建設とその祭祀については、最近各地の調査と研究が進みつつある。<sup>(6)</sup>

しかしその前提とされた海外の主要戦場跡に建設された忠霊塔については調査報告がほとんどない。顕彰会の事業としての忠霊塔建設を考察する上で大きな空白と言わねばならない。

大阪の忠霊塔や「満州」(中国東北地方の俗称。本稿では煩瑣を避けるため以下「」は省略する)の忠霊塔について論考を纏めるために集めた史料の中に、一部だが中国の主要会戦地に日本軍が建設した忠霊塔の記述が見られた。そして筆者は2009年夏到北京を訪ねる機会があり、短時間だったが中国の新聞を閲覧することができた。その後も僅かながら関連する資料を集めた結果、北京と上海に建設された忠霊塔の一定の姿を掴むことができた。

ただし中国の戦場跡に顕彰会が提唱し日本軍が建設した忠霊塔は張家口にもあったとされるが、<sup>(7)</sup>今回は調査不十分でこの〔研究ノート〕に含めることはできなかった。従って三基の忠

(4) 1938年5月5日陸軍省令第一六号の「陸軍墓地規則」では分骨の合葬が原則とされた。

(5) 『中外日報』1939年11月17日。通牒名は「支那事変に関する碑表建設の件」となっているが、内容は主に忠霊塔建設事業に対する規制であった。

(6) 管見の範囲でも次々に各地の事例が解明されているが、筆者がその成果に学んだ一部を挙げておく。坂井久能「神奈川県における忠霊塔建設」『神奈川県高等学校教科研究会研究集録神奈川の戦争と民衆』1977年

栗津賢太「近代ナショナリズムにおける表象の変容——埼玉県における戦没者碑建設過程をととして——」『ソシオロジカ』第26号、2001年

今井昭彦「忠霊塔の歴史的考察——群馬県下の事例を手掛かりとして——」『群馬評論』第55号、1993年

本康宏史「慰霊のモニュメントと『銃後』社会——石川県における忠霊塔建設運動」『国立歴史民俗博物館研究報告』第102集、2003年

小幡尚志「高知市による戦死者慰霊——忠霊塔の建設(1941年)を中心に——」『海南史学』第44号、2006年

(7) 菱莉隆『忠霊塔物語』童話春秋社、1942年10月、128頁に次の記述がある。

興亜の聖戦に血を流した大陸の主要地の中から、特に張家口、北京、上海の三ヶ所を選び、それぞれ

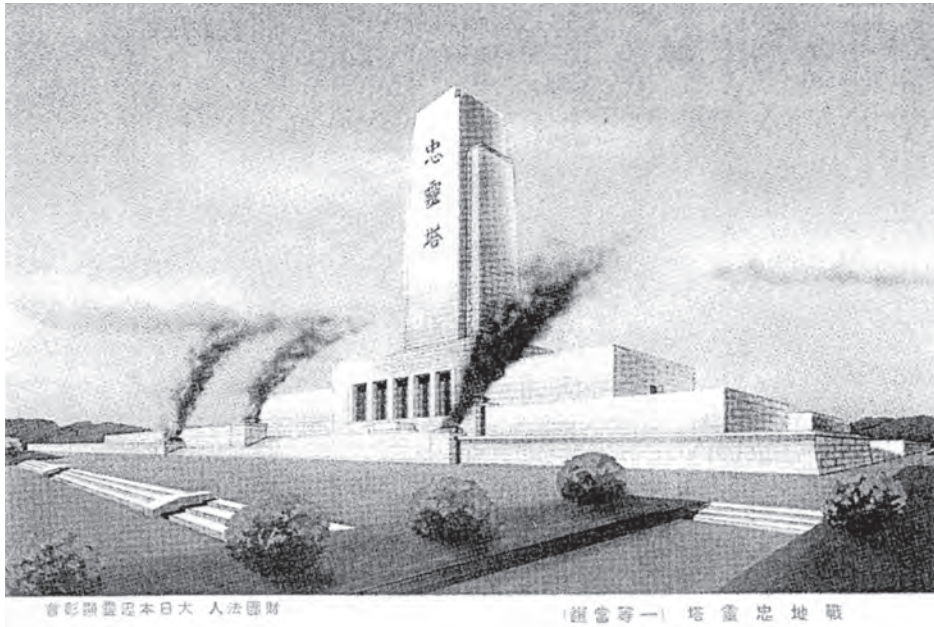


図1 中国大陆の戦地に建てる忠霊塔

顕彰会の応募作品で一等に当選した様式図案の一つ。辻子実『侵略神社』（新幹社、2003年）115頁所載。

霊塔を総合して中国の忠霊塔全体について論考することは今後の課題としたい。

今回は現時点で知り得た範囲で北京と上海の忠霊塔について報告する。

## 2 北京の忠霊塔

北京の忠霊塔についての多少纏まった記述は、管見によると1942年10月に顕彰会が発行した『忠霊塔物語』の次の一文である。

（忠霊塔建設事業は——引用者補足）内地がかく進展する時、本会でもつとも力をそゝいてゐる戦地に於ても着々進捗を見、張家口では目下大工事が継続され、北京も地鎮祭が終わり、近々着工の運びとなつてをり、上海もまたこれに次いで工事を起こ

すことになつてゐるのでありますが、これら大陸の忠霊塔は、いづれも丸ビルと高さを競ふほどの堂々たるもの（206頁）

本書の発行が1942年10月であることから、この文が執筆されたのは同年初と考えられる。その時点では北京では地鎮祭が済み、忠霊塔の着工を待つ段階だったことが分かる。

「丸ビル」とは1923年に竣工した東京駅前のオフィスビル、旧丸の内ビルディングのことで地上9階地下1階あり当時「東洋一」と称された。その高さは約31メートルであった。それと高さを競う設計で中国の三基の忠霊塔が計画されていたことが分かる。

顕彰会は発会間もない1939年8月に、忠霊塔の形態を揃えるため、広く全国の建築家に呼びかけて様式図案を公募した。その際、中国大

れ理想の浄地を卜して、ここに大忠霊塔を建設し、その方面に派遣せられた各部隊の、名誉高き戦死者の遺骨を内に納め、かくして輝かしき新東亜建設のために、胎されたところの、偉大なる不滅の

勲功を永遠無窮に伝へることとなりましたのは、洵に喜ばしく、まことに意義深いことと申さねばなりません。

陸の戦地に建てるもの、日本国内の大都市に建てるもの、国内の地方町村に建てるものと三種に区分した。1940年1月には、1699点の応募作品から49点の当選図案を『忠霊塔図案集』<sup>(8)</sup>とし、この中から選んで忠霊塔建設を進めるよう呼びかけた。

中国大陆の戦地跡に建てるものは、「建設地が大陸なることを考へ特に雄渾のものたるべし」と但し書きが付いていた。<sup>(9)</sup> 耐火、耐震構造とし、「今次聖戦に護国の華と散りたる我が忠勇義烈の士の分骨を安置してその忠霊を顕彰しその偉勲を記念すると共に日本全国の感謝の意を表徴し以て皇国を中心とする東洋永遠の鎮護たらしめんとするにあり」（忠霊塔設計図案懸賞募集規定）とされ。

巨大な忠霊塔の建設には巨額の費用がかかる。満州や日本国内では忠霊塔建設のために日本人の募金運動を組織できた。そしてそのことが、同時に満州事変、日中戦争に日本の国民を動員する一環として利用された。<sup>(10)</sup>

しかし日本人の殆どいない中国大陆の会戦地では、そこの日本人を組織して募金と呼びかけることは不可能であった。そのため日本国内の募金で集めた資金で日本軍が主体となって忠霊塔が建設されたものと推定される。ただし日本の文献では、建設の具体的状況は確認できていない。

忠霊塔を建てることになった北京の当時の状況を簡単に見ておきたい。

1937年7月7日に北京南郊の廬溝橋で始まった日中両軍の衝突は、直後の現地での停戦協定で一旦停止された。しかしこの際中国に一撃を加えれば当時の日中間の諸課題が一挙に日本に有利に決着がつくとする陸軍の強硬論に、成立

間もない第一次近衛文磨内閣は同意した。航空兵力を含む日本軍兵力の増強が続き、現地の緊張は高まった。

当時中国の華北の最高責任者であった宋哲元は日本との妥協の道を探ったが、部下の中には強い抗日感情があった。また当時南京にあった国民政府は日本政府の派兵決定と政府声明を日本の開戦決意と受けとめ、抗日民族統一戦線結成に大きく舵を切った。中国共産党は第二次国共合作を呼びかけ、抗日民族統一戦線による徹底抗戦の声が強まった。9月22日に第二次国共合作が正式に成立した。

7月28日日本軍は宋哲元指揮下の第二九軍に総攻撃を開始し、圧倒的航空兵力の支援下北京・天津を制圧した。北京城内の中国軍は古都を戦禍からふせぐために撤退し、北京と天津とその周辺は日本軍が占領した。<sup>(11)</sup> そしてこれが以後8年にわたる日中全面戦争の始まりであった。

この時以来、日中全面戦争の発端の地でもある中国の古都北京は、日本が降伏する1945年8月まで日本軍の占領下に置かれた。

宋哲元是北京撤退にあたり、第三八師団師団長張自忠を冀察政務委員長、綏靖主任兼北京市長代理とし事態の收拾を委ねた。<sup>(12)</sup> しかし日本軍は意のままにならなかった張自忠を罷免し、日本軍の影響下の新しい冀察委員会を組織した。<sup>(13)</sup>

1937年末には「華北の独立」、国民政府からの離脱を掲げてこの冀察委員会は「華北臨時政府」に衣更えした。その後1940年3月に日本軍の支援で汪精衛の南京「中央政府」が成立すると、その傘下に入り「華北政務委員会」に組織替えした。<sup>(14)</sup>

(8) 顕彰会『忠霊塔図案集』朝日新聞社、1940年

(9) 同前64頁

(10) 拙稿③135頁、拙稿④13頁。

(11) 藤原彰『日中全面戦争』、『昭和の歴史』第5巻、

小学館、1988年、88～100頁。

(12) 鄧珂「華北臨時政成立のてんまつ」、大沼正博訳『北京の日の丸』岩波書店、1991年、4頁。

(13) 同前5頁。



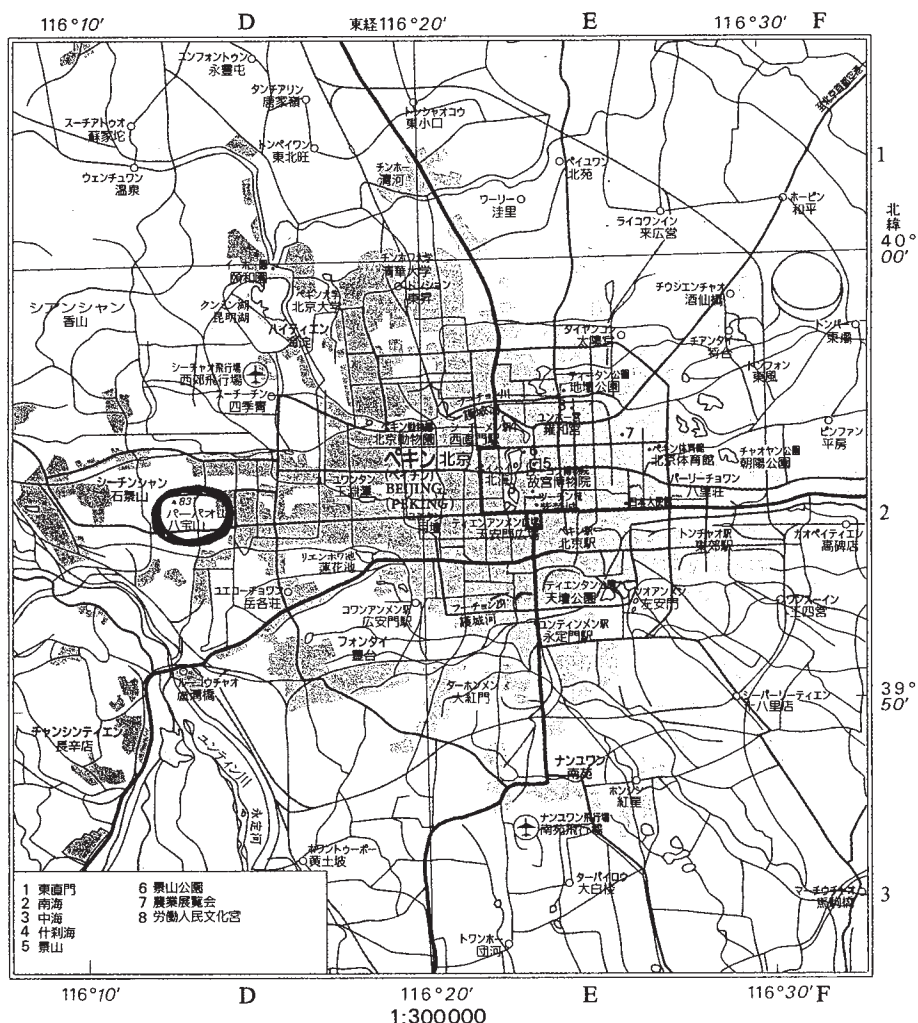


図2 北京忠霊塔の位置（八宝山）

梅棹忠夫他監修『世界全地図・ライブアトラス』講談社、1992年69頁より縮小コピーに加筆。

1937年末の「華北臨時政府」成立直後に、「政府と表裏一体」、「純正の民意機関」を標榜する新民会が組織された。新民会は現在では「日本参謀本部と日本特務機関がでっちあげた漢奸組織であった。それは『満州国』の『協和会』を手本にした。」と評されている。<sup>(15)</sup> 1938年1月1日に新民会の「中央指導新聞の性格」を具えた『新民報』が発行された。1944年3月30日

に日本側からの資金援助が途切れて解散するが、盛時には134か所の総支社と分社を持ち、32万部を発行した時期もあった。<sup>(16)</sup>

そこで『新民報』を通して北京の忠霊塔建設の記事を調べることにした。『新民報』が所蔵されていた北京首都図書館で、顕彰会が結成された1939年7月から1943年5月までの記事を読覧した。<sup>(17)</sup>

↘(14) 同前7頁。

(15) 果勇「華北占領区の新民会」、前掲『北京の日の丸』29頁。

(16) 同前40,41頁。

(17) 2009年9月5日、7日に閲覧。

残念ながらこの調査では、直接北京忠霊塔建設の記事を見つけることはできなかった。しかし、『新民報』の紙面から「華北臨時政府」や「華北政務委員会」の軍事治安組織の隊員が、中国の抗日軍と衝突して戦死した場合の慰霊祭の記事が相当ありその様子を知ることができた。<sup>(18)</sup>更に「皇軍慰霊祭」などの見出しで日本軍戦没者慰霊祭の記事も散見され、「日本靖国神社大祭」の記事もあった。<sup>(19)</sup>

だが『新民報』の編集は、管内のすべての出来事をキャッチして網羅的に報道する体制にはなく、日本軍が次第に持久戦から守勢に立たされると日本軍の戦闘「勝利」の報道や新民会のキャンペーン記事が増え、慰霊祭などの記事は少なくなった。また今回は時間の制約で1943年5月分までしか調査できなかった。また閲覧した期間内でも北京首都図書館に所蔵されていない月（1940年3,4,7,8,11,12月、1941年3,4,5,6,7,8,9,10,11,12月、1943年6月）の分も少なくないため、調べられなかった号の中に北京忠霊塔の記事がある可能性も否定はできない。以上の制約から今回の『新民報』の調査では、これ以上は明らかにできなかった。

その後文献調査の中で関文「日军侵华期间在北平西郊建立的忠灵塔与靖国神社」<sup>(20)</sup>の存在を知った。この論考によって、現在中国で明らかにされた北京忠霊塔の概要を学ぶことができた。その主要部分の日本語抄訳<sup>(21)</sup>を以下に

記す。

北京の石景山区八宝山革命公墓の西側の山頂に聳え立つ一基の水色の瑠璃で覆われた四角の殿堂―老山納骨堂。これは日本人侵略者が中国を侵略した時に建てた“忠霊塔”の遺跡である。

1937年七七事変の後、日本軍は挙って我が国に侵入した。中国軍と中国人民は奮戦し勇敢に抵抗したため、日本軍は惨めで多大な損害をこうむった。その一年間の死亡者数は数万人以上にものぼった。

1939年9月、南京にある日本の中国派遣軍総司令部は、戦死した日本軍将兵の靈魂を“慰安”するため、占領した主要都市に“忠霊塔”を建設することを命令した。

日本軍の華北方面司令官である多田駿は、ただちに先に述べた八宝山と老山との間にある山に“忠霊塔”とそれを祀る社を建てた。その社が落成した際、殿堂は大きく大門は南に向かって建ち、両側のレンガの壁は油のランプで飾っていた。中央には方形の塔が建ち、その頂部には二重の<sup>ひさし</sup>廂（檐）があり、さらに頂上は尖って高く、塔の上部には大日章旗を飾り、不気味な様子は怖いほどであった。

石景山区の一画には、日本人の“靖国神社”<sup>(22)</sup>があった。紅光山の麓にある人工的に造った新しい村の東北隅に設けた。1943

(18) 例えば1937年7月の『新民報』には次の4件の記事があり、「華北臨時政府」が戦没者を手厚く追悼していると宣伝している。

7月7日 戦没将士慰霊祭

7月8日 盧溝橋2周年、一文字山昨盛大慰霊祭

7月10日 興亜記念週間、殉亡者追悼会

7月26日 華北各隊陣亡病没者合同慰霊祭

(19) 例えば1939年9月3日、1940年1月8日には「皇軍慰霊祭」の記事があり、1941年4月26日には「日本靖国神社大祭」の記事がある。また1941年7月14日に掲載された「蒙疆忠霊塔挙行盛大開工式」は、今回はまとめられなかった張家口忠霊塔の起工式の記事であった。

(20) 北京市政協文史資料委員会編『北京文史資料』第52輯、1995年12月「紀念抗日戦争勝利五十周年」特集所収。

(21) 筆者抄訳、朴錦玉氏に補訳してもらう。

(22) 北京神社のことを指すと思われる。辻子実『侵略神社』新幹社、2003年の207頁には1940年に鎮座した北京神社規定として北京在住の大日本帝国臣民を氏子とし、北京に在住しない大日本帝国臣民、および北京に在住する中華民国人並びに外国人にして敬神の念あつく北京神社を敬仰せんとする者を崇敬者とし、氏子と崇敬者は神社経営維持の義務を負うことになっていたことを指摘している。

年秋にこの神社は落成した。落成の祭典は非常に盛大だった。日本人神主 13 人は服装を整え腰に鼓をつけて叩き、祝詞を読んだ。参加者は日本軍や政官の重要人物と各界名士と日本人居留民団などであった。その中には多田駿や金壁輝（川島芳子）など

もいて、600 人余りの参加者であった。東京都の“靖国神社”は何回かの対外侵略戦争中に死亡した日本軍の官兵を祀ってきた。“靖国”の意味は、“安らかに治まる国であるようにする”ということである。このような意味の“神社”及び“忠霊塔”を侵略している国に建てたことに、中国人は鼻で笑って軽蔑することを禁じられなかった。

1945 年に中国は抗日戦争に勝利した。石景山の“靖国神社”は憤った当地の人民によって取り除かれたが、“忠霊塔”は張自忠が改造して我が国の抗日愛国将兵の忠烈祠とした。塔の上部に掲げられた大日章旗は、青天白日旗に取り替えられた。新中国成立後、北京人民政府は人々の意見により忠烈祠を取り除き、元々あった建物の内部を改造して老山納骨堂とした。

長い引用となったが、日本の史料では分らなかった北京の忠霊塔と、併せて造られた「靖国神社」の略経緯が明らかにされている。<sup>(23)</sup>

しかし北京忠霊塔の建設時期が、この論考では 1939 年 9 月の直後のように読み取れるが、『忠霊塔物語』では 1942 年初に着工を待つ段階であったと記述されていて未解明である。論考では多田駿が「華北方面司令官」として記述されている。陸軍中将の多田駿が「北支方面軍司令官」であったのは、1939 年 9 月 12 日から 1941

年 7 月 7 日までであった。<sup>(24)</sup> 1942 年に着工を待つ段階だったとすれば、起工を決定し地鎮祭をしたのが多田中将だったということも考えられるが完工時期は未詳である。

なお論考では戦後忠霊塔を改築して忠烈祠として使用するようにしたのが張自忠とされている。しかし張自忠は人名辞典<sup>(25)</sup>によれば抗日戦争で 1940 年に戦死している。戦後張自忠は抗日の英雄として北京、天津に記念碑が建てられている。従って 1945 年に忠霊塔の処置について関わったとする論考の記述は誤りと思われる。

人名辞典には、張自忠に並んで張治中が記載されている。<sup>(26)</sup> 張治中は国民党内の民主派の軍人、政治家であり、1945 年の抗日戦争勝利後は国共両党間の和平交渉を進め、「双十協定」調印にこぎつけた。1969 年 4 月に北京で病死するまで折々に活躍している。北京の忠霊塔破壊の声を説得して改造の処置に関わったのは張治中だったのではないか。今後の調査課題の一つである。

なお論考にある忠烈祠を取り除いたという記述が、忠霊塔を取り壊したのか、忠烈祠に改造されたものを納骨堂に改造したのかは不明である。現地調査ができていないので、これも今後の課題である。

なお現状については竹中憲一「北京のお墓——八宝山革命公墓」に次の記述がある。<sup>(27)</sup>

北京市では現在、土葬を禁止しているので、1960 年代ごろまでに亡くなった人を埋葬してあるようだ。それ以後亡くなった指導者は本堂の納骨堂に納められている。

毛沢東は記念館に遺体が安置されており、劉少奇、周恩来は中国の大地に遺骨をまい

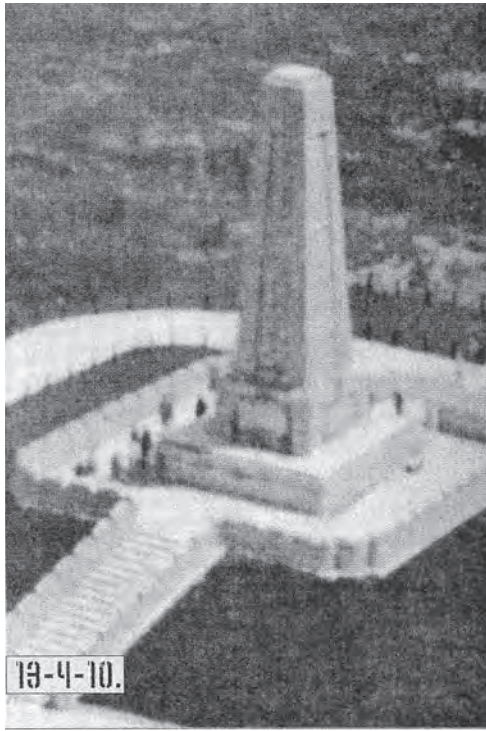
(23) 関績文「日本軍が中国を侵略した時期に北平市の西郊に建設された忠霊塔と靖国神社」註(20)所収、131～133頁。

(24) 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年、325頁。

(25) 山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会、1995年、1162～1163頁。

(26) 同前 1161～1162頁。

(27) 竹中憲一『北京歴史散歩』竹内書店新社、2002年、330～331頁。



13-4-10

日军鼓吹武士道精神，为战死者建造“神社”或“忠灵塔”，寻求自我麻痹。据统计，日军在上海共有类似建筑物 20 余处。“小东京”内也有忠灵塔、神社和慰安所等，形形色色，乌烟瘴气。这是 1939 年建于大场镇上的忠灵塔，用以所谓祭奠“八一三”中在这里丧生的数百名日军。二战后被当地民众拆毁。

図3 上海の忠霊塔（大場鎮）

上海市档案馆編『日军占领时期的上海』上海人民出版社、2007 年 191 頁所載写真と説明文。

た。現在、八宝山には朱徳、賀龍、陳毅などの遺骨が納められている。(略) この八宝山革命公墓に納骨されているということは最高の荣誉とされている。友人のお父さんが現職の政府高官として亡くなったが、八宝山革命公墓に入れなかったといって友人が悔しがっていた。革命の経歴が短かったことが原因らしい。

この八宝山は明代に建てられた護国寺の跡である。(略) 新中国が成立後に革命烈士のための墓として修復された。後殿の納骨堂は昔のままだそうだ。

八宝山一帯は清明節（4 月 5 日ごろ）になると墓参りの人でごったがえす。清明節は日本のお盆にあたり、故人や先祖を祭るならわしがあるからである。家族は故人の好きだった食べ物をもって八宝山から 1 キロ

ほど離れた老山に行き、そこにある納骨堂から遺骨の入った小箱を出してもらい、野外で遺骨を囲んでささやかな夜宴をひらき故人をしのぶのである。(略) 一般民衆は、老山の納骨堂に 2 年は納骨できるが、そのあとは自宅に持ち帰るか、土にかえすかすることになる。現在、北京市では新たな墓を建てることは禁じている。

この文の中段の「革命烈士のための墓として修復された」のが忠霊塔であったのか、検討課題である。

### 3 上海の忠霊塔

上海の忠霊塔については、先にみた『忠霊塔物語』では張家口、北京のあとで「上海もこれに次いで工事を起こす」と書いてあった。つま



り 1942 年初には未だ着工もしていなかったことになる。

ところが中国で発行された『日军占领时期的上海』<sup>(28)</sup> には、上海忠霊塔の写真が掲載され次の説明文が付いていた。説明文の日本語訳を掲げておく。<sup>(29)</sup>

日本軍は武士道精神を鼓吹し、戦死者の為に“神社”や“忠霊塔”を建て、自主的判断力を麻痺させた。統計によれば、日本軍はそうした施設を上海に 20 余箇所作った。“小東京”として、日本にあるのと同様の忠霊塔、神社や慰安所など、形態は様々で混沌としていた。この上に掲げた写真の忠霊塔は、上海市大場鎮に 1939 年に建設したもので、八・一三事件<sup>(30)</sup> で死亡した在中国日本軍兵士数百人を祭り慰めるために用いられた。第二次大戦後、当地の人民によって打ち毀された。

ここでは上海忠霊塔は 1939 年に建設されたことと明確に書かれている。しかも建設場所も、上海市大場鎮であったことを明らかにしている。また戦後すぐに破壊された以前の写真が不鮮明だが残されていて、その規模や形態が分かり貴重な手懸かりとなる。

だが、『忠霊塔物語』の建設時期との矛盾は課題として残る。今後他の文献にもあたって考察を進めたい。

ところでなぜ上海の忠霊塔は大場鎮に建てられたのか。このことを検討するため、第二次上海事変当時の大場鎮の状況を見ておきたい。<sup>(31)</sup>

1937 年 7 月 28 日の華北での日本軍の総攻撃は、国民政府の蒋介石に事態が「最後の関頭」にたちいたったと言わしめた。上海は中国最大の工業都市であり、労働者・学生を中心に抗日

民族運動が盛んだった。上海含めて華中は、日本海軍が駐屯軍事力の中心だったが、日中両国関係が緊迫すると海軍は陸軍の上海派遣を要請した。

8 月 12 日、参謀本部と陸軍省は兵員 30 万人、馬 87,000 頭という大規模な上海への陸軍派遣を決定した。松井石根大将を上海派遣軍司令官とし、8 月 23 日から上海北方の呉淞などの海岸線に上陸した。日本軍が上海に大軍を派遣したのは、短期間に中国軍に打撃を与え日本に有利な和平に持ち込むためであった。

日本軍が上陸する旬日前の 8 月 13 日、中国軍と日本海軍陸戦隊は上海の共同租界の東部で交戦状態に突入した。日本海軍の基地航空隊は 8 月 14,15 日にわたり杭州、南昌、広徳、南京などの中国空軍基地に対して渡洋爆撃をして制空権を掌握した。8 月 14 日、国民政府は抗日自衛の声明を発表した。蒋介石は全軍に抗日戦を命じ、短期に終わらない日中全面戦争に拡大した。

中国軍は首都南京防衛のために重点地区として上海に兵力を集中しており、抗日救国の意識は強かった。日本海軍陸戦隊は中国軍包囲下で苦戦に陥ったが、制空権、制海権を握って交戦を続け陸軍の派遣部隊の応援を待った。上海周辺は縦横に水濠（クリーク）が走り、日本軍の部隊行動を妨げた。

上海北方の海岸線に上陸した日本軍に対し、中国軍は中央直系の精鋭部隊を投入した。そのため上陸しても日本軍は海岸線に釘付けになり損害が続出した。その結果派遣された日本軍は海軍陸戦隊と容易に合流できず、日本陸軍はさらに増派を続けた。<sup>(32)</sup>

防衛庁の戦史叢書『支那事変陸軍作戦＜1＞』

(28) 上海市档案馆編『日军占领时期的上海』上海人民出版社、2007 年、191 頁。

(29) 筆者訳、范青峰氏に補訳してもらう。

(30) 1937 年 8 月 13 日、上海で日中両国軍が交戦し第

二次上海事変が始まった衝突を指す。

(31) 藤原彰『日中全面戦争』前掲 101～116 頁。

(32) 同前 118 頁。

上海付近戦闘経過要図（その二）  
（昭和十二年十月～十一月中旬）

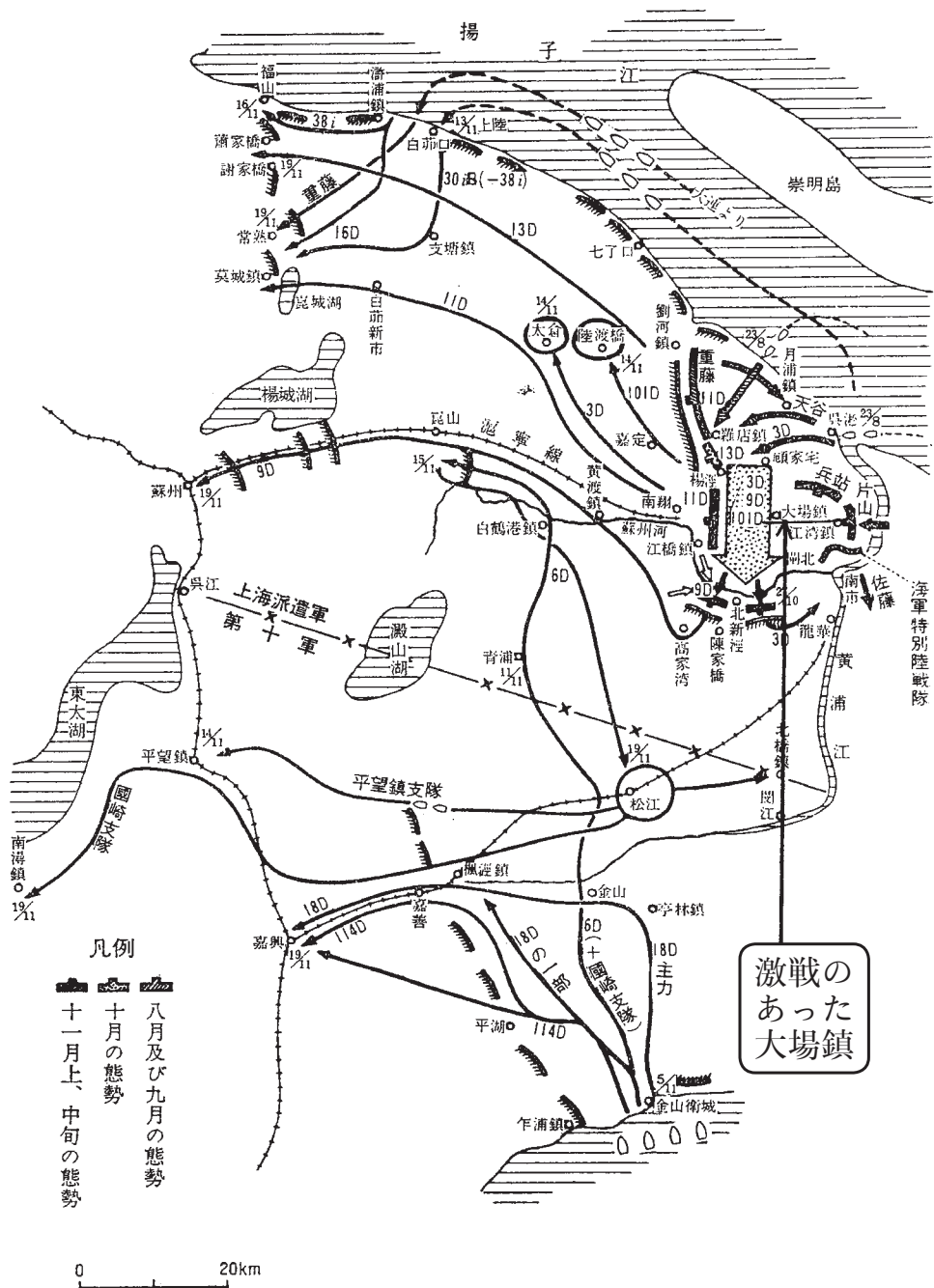


図4 第二次上海事変における大場鎮

防衛庁防衛研修所戦史室『支那事変陸軍作戦＜1＞』朝雲新聞社、1975年400頁より縮小コピーに加筆。

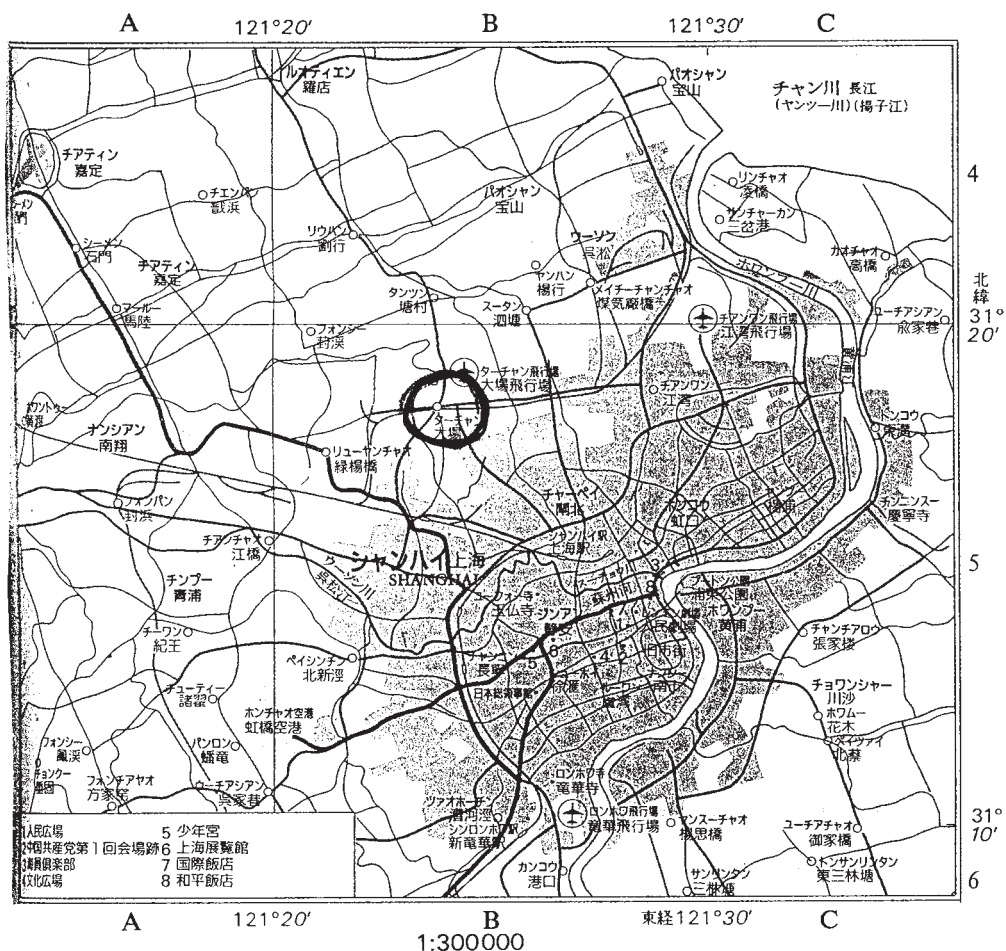


図5 上海忠霊塔の位置（大場鎮）

梅棹忠夫他監修『世界全地図・ライブアトラス』講談社、1992年69頁より縮小コピーに加筆。

は、この「大場鎮、蘇州河付近の戦闘」について次の様に記述している。<sup>(33)</sup>

上海方面においては、9月中旬、3師団半及びその他の兵力を増強し、10月中旬にはこの方面の敵に大打撃を与え、北支方面の作戦成果と相まって、事変の早期終結を期待していた。(略) 上海派遣軍司令官は、9月29日、事後の作戦指導に関し次のように定めた。

一 楊涇西岸の敵陣地はこれを攻略するこ

となく、主力は南方に左旋回を行い、右から第九・第三・第百一師団を第一線とし、大場鎮付近に対する攻撃を準備させる

- 二 第十一師団を楊涇の線に進めて旋回の右側面を掩護させる
- 三 第十三師団を第二線兵団として軍主力の右翼後に保持す
- 四 右の兵力部署をもって大場鎮付近の敵を攻撃し蘇州河の線に進出する。この間、

(33) 防衛庁防衛研究所戦史室編『支那事変陸軍作戦

<1>』朝雲新聞社、1975年、379～383頁。

軍主力の南進に伴い、第十一師団主力をなるべく南方に移し、西方に対して軍主力の側面を掩護させる

以上の作戦指導に沿って10月4日、派遣軍司令官は大場鎮攻略計画を策定し、中旬には大場鎮付近の中国軍を撃破する方針を定めた。しかし中国軍の抗戦は激しく計画より旬日遅れた10月26日、やっと大場鎮を攻略した。日本海軍陸戦隊が交戦していた蘇州河の線に到着したのは27日のことであった。

8月に陸軍が上陸してから11月8日までの3ヶ月足らずの間に、上海方面の戦死傷者は4万人をこえる大損害を受けた。<sup>(34)</sup>

上海全戦線で死闘が繰り広げられたがその代表的戦場の一つが大場鎮であった。そこで上海の忠霊塔の建設地に大場鎮が選定されたものと推定する。なお先に引用した『日军占领时期的上海』の忠霊塔の説明文には、「八・一三事件で死亡した」とあるが、「八・一三事件以来死亡した」と理解すべきであろう。数百人の死者のためだけに大忠霊塔を建設するとは考えられないからである。

なお上海の公共租界とフランス租界は、英米仏が日中戦争に関しては当時は中立国であるため日本軍に占領されなかった。この上海の租界は日本軍に包囲され「孤島」となったが、その中でも抗日運動が続けられた。「孤島は孤立ではなく、抗日戦争は（中国—引用者補足）全国民から激励と支援を受け、同時に全国民の抗日闘争を励ました」と評されている。<sup>(35)</sup>

こうした状況にピリオドを打ったのが1941年12月のアジア太平洋戦争の開戦であった。日本軍は全上海を占領し、1943年7月下旬、汪精衛政権が公共租界とフランス租界の管理権を掌握した。<sup>(36)</sup> いつ上海に忠霊塔が建設され

たかを考えるにあたって状況を検討するための一資料とするため付記しておく。

ところで間接的ながら、中国大陆における顕彰会の忠霊塔建設の動向を伝える資料が残っている。北京の忠霊塔を調べるために調査した『新民報』1939年8月16日付に、「同盟社漢口15日電」の短い記事が掲載されていた。以下に一部を抄訳する。<sup>(37)</sup>

大日本忠霊顕彰会の桜井徳太郎、高島辰彦両大佐は、13日に漢口に飛行機で到着し、14日には武漢などの各戦線跡を視察した。その後現地の当局者と忠霊塔建設について話し合った。（略）会の予定としては華中方面では上海と漢口の2か所に忠霊塔を建設し、九江と南昌方面には戦跡記念碑を建設する見込みである。（略）また将来的には新中国建設のために命を落とした中国人や蒋介石の犠牲となって死体を曝した中国無名戦士の供養塔も建設する予定である。

華中方面では、顕彰会の計画には上海だけでなく漢口にも忠霊塔があったことが分かる。しかし後に顕彰会の全体計画を述べた菱荊隆会長の『忠霊塔建設物語』では、先に引用した通り中国では張家口、北京、上海の3か所に忠霊塔を建てることになっている。どうしてそうなったのかを説明する直接の資料は見当たらない。ただし日中戦争から引き続いてアジア太平洋戦争に突入して戦没者がさらに増加すると、顕彰会の忠霊塔建設の力点が日本国内の忠霊塔建設に移ったのではなかろうか。

また忠霊塔以外の戦跡記念碑の建設も併せて提起している。記念碑は本稿ははじめにで触れた通り納骨施設を伴わない。戦跡記念碑は勝利と栄光の記憶が記録され刻まれたもので、戦没者追悼の施設とは異質であった。『忠霊塔物語』

(34) 藤原彰『日中前面戦争』前掲118頁。

(35) 楊克林・曹紅編著『中国抗日戦争図誌（日本語版）』下巻、柏書房、1994年、505頁。

(36) 同前505、533頁。

(37) 筆者訳。



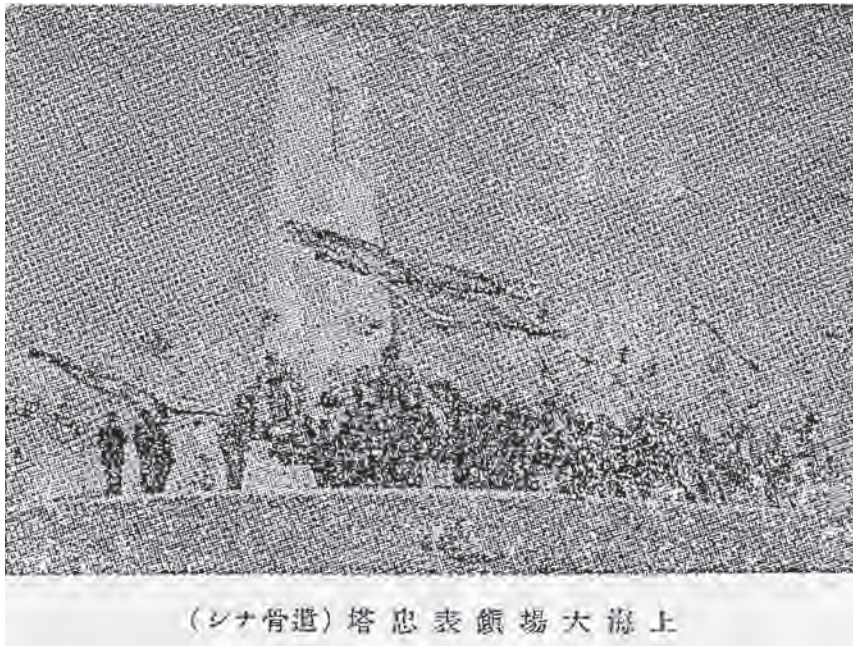


図6 上海大場鎮表忠塔

荻菱隆『忠霊塔物語』童話春秋社、1942年127頁掲載写真とキャプション。

には「上海大場鎮表忠塔」の写真が掲載しており、<sup>(38)</sup> 1942年初の時点で既に大場鎮には竣工した記念碑が存在していたことが分かる。「表忠塔」は戦争での忠義の将兵を称える記念碑であり、遺骨を収納する忠霊塔とは異なる。上海大場鎮表忠塔のキャプションには、わざわざ「(遺骨ナシ)」と明示している。先に紹介した図3の解説に「上海にはそうした施設を20余箇所作った」とあるが、上海大場鎮表忠塔はその一つだったのであろう。

なお、『新民報』の記事の最後に触れられている交戦相手国（つまり敵）である中国戦没兵士の供養柱や、日本軍に協力した中国人（中国から見れば日本軍の傀儡政権協力者）の死亡者の供養柱の問題は、本稿の「おわりに」の中で改めて検討する。

以上をまとめると、1939年8月時点では上

海忠霊塔の建設が予定されていたこと、中国の文献では1939年に上海忠霊塔が完成したと記録されていること、『忠霊塔物語』が刊行された1942年に顕彰会の記述としては張家口、北京に次いで上海に忠霊塔が建設されることになっていたこと、その時期は現在確定できないが1945年までには上海忠霊塔が建設されたこと、第二次大戦後上海の人民によって打ち毀されたことなどである。

#### 4 おわりに

最初に述べた通り、本稿は中国大陆に日本軍によって建てられた忠霊塔の全体像を明らかにするための前提を整理したものである。一部ではあるがそこから見えてきた問題点を二点にわたって考察しておきたい。

(38) 前掲『忠霊塔物語』127頁。

一点目は日中戦争で交戦している相手国の領土内に、自国将兵の戦没者分骨を纏めて納骨して追悼する施設を建設するという思想についてである。

これは自国内に忠霊塔を建設することとは明らかに異質の思想である。日中戦争の主要な戦場跡に建てられた忠霊塔は、遺族のための戦没者追悼のための施設として建設されたものとはいえない。もちろん遺族が参拝団に組織されて、戦地の大忠霊塔にやってくることはあったかもしれない。しかし顕彰会が最初に提起したような、遺族が身近に日常的に参拝できる追悼施設ではなかった。

だとすれば何のために主要な戦場跡に、特に「雄渾」な忠霊塔を建設する必要があったのだろうか。

身近な場所でなく戦場跡に納骨施設としての忠霊塔を建てた前例は満州にあった。この満州の忠霊塔については、本誌に以前拙稿を纏めたことがある。<sup>(39)</sup> 一口に満州に建てられた忠霊塔といっても、二種に分かれることをそこで論じた。つまり日露戦争戦没将兵の分骨を遺族に還送した残余の遺灰を収納するために、納骨祠からスタートしたのが前期忠霊塔であった。そのまま各地に埋葬して戦後地元の中国人に暴かれることを防ぐというのが始まりだった。これに対して 1931 年からの満州事変戦没将兵の遺族に還送した分骨の残灰を集めて、主要戦場跡に忠霊として顕彰するために建設されたのが後期忠霊塔であることを指摘した。

後期忠霊塔で注目される点は、戦没将兵の遺

族よりも満州に居住していた日本人を動員、組織して募金し勤労奉仕をするという参加型の運動によって建設するスタイルをとったことである。つまり満州の後期忠霊塔建設にあたっては、遺族が追悼祭祀の主体とは考えられず、満州に居住する日本人住民を主体とし「自分たちの忠霊塔」と認識することを目指したと考えられることも指摘した。<sup>(40)</sup>

ここで日中戦争における主要な戦跡への巨大な忠霊塔建設は、満州の後期忠霊塔から更に一步新たな思想を目指したものであると考えられることを指摘しておきたい。

交戦国の住民を、日本軍戦没将兵の忠霊塔建設のために組織・動員することはできない。資金は日本の国民の募金によって、建設は日本軍が進めたが、そうしてできあがった忠霊塔はどのような意味を持つのか。この点について顕彰会の見解を伝える『忠霊塔物語』では次の様に述べている。<sup>(41)</sup>

さればまた何の日にかは、かの満州に於ける忠霊塔に見るのと同じやうに、ほんたうに正しい道に立ち直った立派な支那が生れ出で、四百余州四億の民衆が、悉く幸福に平和に、真の樂土を築いて暮らし得られるやうな時代が来たならば、必ずやわが国民と同じやうな、至純至高なる立派な気持ちになって、彼の国の人々もまた、男女老幼の別なく、吾先にとこの塔に詣で来て、心から感謝の祈りを捧げるに相違ありますまい。さうして私たちは、一日も早くその日が来るようにと、待ち望んでゐる次第であ

(39) 拙稿③。

(40) 関東局在満教務部教科書編集部編著『マンシウ教師用』1942 年、71 頁には忠霊塔の学習に際して、次の 4 点を満州にいる日本人児童に教育するよう、指導の留意点として挙げている。

1. 忠霊塔参拝 一年生として入学した喜びを奉告し、英霊に対して感謝の念を捧げさせる。
2. 英霊の勲功について説話する。

3. 挿絵及び掛図について次のやうな話合をする。

①新京の忠霊塔である。

②忠霊塔には殉国の英霊を祀ってある

③全校生徒が真心を込めて感謝の祈を捧げている

4. 英霊の志をついで立派な皇国民となるやう、将来への覚悟におよぶ。

この史料は拙稿④で引用紹介した。

(41) 前掲『忠霊塔物語』128、129 頁。

ります。

「満州に於ける忠霊塔に見るのと同じやうに」と述べているが、ここには大きな違いがある。先に触れた通り満州の後期忠霊塔は、満州居住の日本人をその建設、維持に動員し一応成功した。しかし中国では、中国人が「正しい道に立ち直った」、つまり抗日戦争を止めて中国に侵入した日本軍戦没将兵に感謝の祈りを捧げることを予定していると語っている。

これは最早戦没者追悼の思想ではないと言わなければならない。そうした顕彰会の思想と日本国内の忠霊塔建設の思想とを、どう全体として捉えるかが検討課題として登場する。

二点目は『新民報』の1939年8月16日の記事の最後にあった中国人の供養塔を顕彰会が建設する予定である、と述べている点をどう見るかという問題である。

早くから戦没者祭祀をテーマに研究を進めてきた今井昭彦は、顕彰会が発足する直前に菱荊隆が「忠勇なわが勇士ばかりではなく支那兵も死ねば国家に尽くした人だ、皆葬ってやるべきである」と語った言葉について次のように指摘している。<sup>(42)</sup>

味方だけを祀り、敵を排除するという靖国神社の祭祀形態から大きく逸脱するものであった。これは仏教の怨親平等の思想に因っているものと考えられ、現実には敵の遺骨も忠霊塔に納骨されたかとなると、その可能性はきわめて低いと思われるが、こうした点も鑑みると、戦死者の魂のみを祀った忠魂碑（遺骨なし）は、明らかに靖国神社の系譜に連なる慰霊施設であるが、納骨を前提とした忠霊塔は、この系譜とは別の新たな慰霊施設として、さらなる研究の対象とされなければならない。

この指摘の対象となった菱荊隆の発言は、3年後の1942年には『忠霊塔物語』では次のようにある意味では具体化し変化している。<sup>(43)</sup>

仁義を生命とする私共日本人は、むかしから敵を憐れむといふ、美しい心の深かったことは、国史の上にも、沢山の例が見られます。さればこそ、この伝統の精神を其のまゝに、今度北京とか、天津とかいふ、重要な土地を占めて、特に支那兵の戦死者のために、それぞれ立派な供養塔が、我方の手によって建てられることになってをりますが、しかしこの方は、先づ忠霊塔が出来上がってから、そのあとで徐々に建設する手筈で、何れ遠からず着手せられるものと信じます。

ここで注目したいのは「支那兵の戦死者のために、立派な供養塔を我方の手によって建てる」という部分で、今井の指摘する通り仏教の怨親平等の思想が反映していると見られる。ただ同時に「先づ忠霊塔が出来上がってから、そのあとで徐々に建設する手筈」として、同じ日中戦争の死者でも厳然と敵と味方を峻別し優先順位を付けている点である。

この点について優先順位をつけずに日中の戦没者などを記念する塔を計画した興味深い事例が紹介されている。<sup>(44)</sup>

日中戦争の最中、1942年12月に南京で日本軍が土木工事中に玄奘三蔵の遺骨を発見し、日本軍占領下で成立した直後の汪精衛政権に日本軍が移管した。その際日本に分骨が渡されるが戦後その分骨をめぐる日中台間の関係を分析した論考の中に、汪政権に移管された直後の汪政権の対応を取り上げている。

中国の伝統文化における偉人を顕彰し、かつ日本側と共同で顕彰活動を行うことは、

(42) 今井昭彦『近代日本と戦没者祭祀』東洋書林、2005年、407頁。

(43) 前掲『忠霊塔物語』130、131頁。

(44) 坂井田夕起子「玄奘三蔵の骨の行方——日本における八カ所の奉安をめぐる——」『近代仏教』第17号、2010年5月、83頁。

汪政権の文化工作にとって大きな意味を持っていた。当初の計画では①汪政権側が玄奘骨塔を再建し、②日本側が三蔵殿を新たに建設。さらに③「大東亜物故者の記念塔」や庭園を新設、南京の大寺院である毘盧寺を含めて「極楽浄土」をつくるという大規模なものであった。

日本軍支持下ではあっても、汪精衛の「中央政府」が構想した③は、日本人と中国人を併せた「大東亜物故者の記念塔」であったということである。日本人用と中国人用の記念塔を別々に作るという発想は出ていない。顕彰会の優先順位を付けた供養塔とは異質であった。

顕彰会が日本軍の支援下に中国に建設した忠

霊塔は、日本国内の忠霊塔建設運動とは異質の側面を持つ。その点もふまえて忠霊塔の思想と戦没者追悼における意味を考えることが必要であろう。

本稿作成にあたっては、北京首都図書館での『新民報』の調査の際、張苓氏、横山芳子氏に格別のご協力を頂いた。また北京での調査の便を高橋敏氏、横山準氏、横山いづみ氏にはかって頂いた。上海での調査の折は横山渉氏の協力を得た。関連した中国語を筆者が日本語に訳すにあたっては、朴錦玉氏、范青峰氏に補訳して頂いた。新聞の閲覧や文献調査に関して北京首都図書館と関西大学総合図書館にお世話になった。記して謝意を表したい。